

# 風雪

NO.52  
FUH-SKETSU

1992.7.15

## 特集号

### 植垣「悪党通信」を批判する 連赤問題をいかにとらえるか その2

- 一章 「溺れるものはワラをもつかむ」という  
植垣の獄中者心理について…………… (1)
- 二章 森や植垣を塩見の人格的体現者として  
演出する植垣の狡猾…………… (4)
- 三章 連赤問題は思想運動の極左急進主義的  
展開なのか…………… (9)
- 四章 植垣は何故「共産主義化」原因論に固執し  
野合原因論に反対するのか…………… (16)

「風雪」編集委員会  
¥ 500

## 一章 「溺れるものはワラをもつかむ」という植垣の獄中者心理について

植垣が「悪党通信」なるパンフで連合赤軍問題についての一文を掲載している。

この文章は連合赤軍問題の事実関係、経過、構造、原因、本質、責任関係について、ねつ造や歪曲、本質や原因の隠ぺい、曖昧さをコンパクトに集大成しており、植垣や永田等の行為を居直り、一方では美化したり、責任転嫁したりするものであり、また、殺された同志達の立場に立たず、彼らを度重ねて、冒瀆するものであり、いつもながらといえはそれまでだが、黙過出来ないものである。しかし、これを検討すれば、彼（彼女）等の心理、思想状況が良く分かること。

植垣・永田が獄中にあって、どれほどお山の大将になり、夜郎自大的自己弁護の世界を作り上げているか、植垣が、反弾圧を名文にしてどれほどお調子乗りをやり、甘ったれているかも良く分かる。一人よがりの世界を防衛するために、針鼠が攻撃された場合、針を立て敵を寄せ付けないよう、身構えてるかがよく分かる。植垣に何ほどの政治的・思想的、理論的前進が見られるとはとても見受けられない。目につくのは、論理操作に巧みになり、より精密に人を攪乱させることに習熟したこと位である。

連合赤軍問題の構造、本質、原因等については、今回の植垣の主張にかみ合わせて批判するが、この文章で注目すべきは、塩見に対して事実無根の誹謗中傷をおこない「塩見さんの提起した方針の実行を要求された我々は」、とか、まったくの詭弁を弄し、塩見に連合赤軍問題の責任（それも刑事上の）をかぶせ濡れ衣を着せようとしていることである。こんな主張を外の誰も信じはないが、植垣、永田にしたら、自分達の獄中卵形世界を防衛するために精いっぱいの攻撃に出てきたということであろう。しかし、この様な挙動は全く卑劣であり、許せないものである。植垣、永田は弾圧にたえかね人の非難をかわすためにはや事實を事實として直視することも出来なくなり、溺れるもの藁をもつかむという、心理に落込み、関係者の誰彼構わず脅しまくり、最後には私に責任をなすりつけんと妄想しているのである。

植垣、永田は最初、連合赤軍問題の直接の責任を森に一切なすりつける、虚構をねつ造する破廉恥を行ったが、こんどはそれに留まらず塩見に責任を集中

しようとしているのである。森が亡くなり、川島氏が亡くなり、連合赤軍問題関係者の人物が塩見に限られる状況であれば塩見に濡れ衣をかぶせたくもなるうというもののか。

永田や植垣の心理は単独犯がなんとしても罪責から逃れる為に、ホンのちょっとした手がかりを足場にして、共犯者を妄想しデッチ擧げて行く心理に酷似している。自分のねつ造したことが虚偽であることを始めは知っておりながら、後では、自己の安心、保身の為に言い続けることで本当に事実とばかり信じ込んでしまうという心理である。独房に拘禁され、不安な被弾圧の生活を続ければ、この様な心理は誰にも働く。しかし、傍らで客観的に事実を調査をしたら、全くたわいもない嘘であり、単なる被拘禁者の願望を描いたものに過ぎない、ということがはっきりすることがよくある。

彼らが何故、有りもしないことを懸命にデッチ上げようとするかといえば、確実に言えることは、塩見が、連合赤軍問題について基本的な事実とその本質を明瞭に掴み彼らの虚構を暴き得る立場と能力を持っていることについての恐怖、牽制心に由来すると言うことである。連合赤軍問題発生以来二十数年が過ぎ、あらかたの関係者が舞台から去った現在でも、なおこの問題と生々しく公的舞台で対決しなければならない位置にあるのは、獄中の彼らと塩見のみになってきているからだ。植垣、永田は「反弾圧、死刑のことを考えてくれ」「黙っておけ！」と、おどしたり、「今の主張を変更してくれ」と愁訴したりしているのである。

私はこの問題について、自己批判すべきは自己批判し、取るべき責任は取ってきたし、弾圧のことも考え、必要な時は自制もしてきたし——公判に出席したら立場徹底的に永田等を批判糾弾することになったのだ——これからもそうする。

しかし、殺された12名（14名）を更に侮辱したり、理由のない濡れ衣を着せられることについては適切に反撃をする。塩見が下獄したり、孤立し反撃の手段を奪われている最中、これを良いことにして彼らはこの画策をやり続けた。嘘も百遍いえば、信じる人も出てくるし、それを信じてなくても政治的に利用する人もわんさといる。あれほど熱心にいい続けているのだから何か有るのでは、と考える奇麗な人も出てくる。そしてこういう風潮が定着すれば、連合赤軍問題を正しく総括し、日本階級闘争を前進させようとする風潮も退潮せざるを得ない。塩見の周りに予断と偏見が渦を巻き政治的抹殺の機運だって醸成される。こういう事態は断固願い下げにする。植垣等の画策は断固粉碎する。

我々は死刑、弾圧攻撃のことを考え、意見、立場の相違は留保しあいつつも、協力し合う関係を提起したが、最近も2・20のパトリシア・スタインホフさんの出版記念の際もそうしたが拒否してきた。なんと弱気で自信のないことか！そして拒否してきたばかりでなく、「塩見さんが提起し、我々に実行を要求した」とか「塩見が指示し」「（自分たち）が実行した」なるとんだ濡れ衣の逆ネジをかませてきたのである。

◎「提起した」「実行した」とか「指示」し、「実行」した、とかという文言が統けば、なにやらおどろおどろしき具体的な「同志殺し」の犯罪・刑事事件の関係を想像するのは自然である。つまり、公的文書とか秘密文書とか、獄からの秘密指令とかが出され、“12名を暴力でもって「共産主義化」し、抹殺せよ”とか“革命戦争貫徹の為に森派と永田派は、路線、思想の相違を「共産主義化運動」でもって克服し、反対派を抹殺し、野合せよ！”とかの指令を塩見が発したのではないか、といった類の想像である。

そうでなくても、せめて「“総括”運動に暴力を導入せよ！」程度の指示は出したのではないか、と推察したりする。実際、植垣は悪賢くも、それを狙って書いている。

しかし、こんな公的、秘密的文書などいっさい書いてないし、この類の口頭の指令もいっさい出してない。出していたれば、噂になるし、物証も残っているだろう。伝令した人も名乗り出るだろう。

川島氏は、獄中から、ある種の直接的指導をしていたようであるが、プロ革派の時の獄中委員会の指導スタイルならいざ知らず、当時、72年頃までは全くそんなことはしていないし、そんな条件はない。基本的な政治文書は書いたが、それは文字どおり、基本的な事柄に関してである。川島氏は獄中から明瞭に反米愛国路線の堅持を訴え、野合に反対する態度を表明した文書を出している。これはこれで良い。

塩見は組織問題について特別な文書は出してないが、「民族民主主義革命論の検討」という文書を書き、反米愛国の民族民主主義革命路線と社会主義革命路線とでは一致しないことを鮮明にした反米愛国路線の批判の文書を出している。八木氏も書いている。

どこにも「同志殺し」を支持する文書など書いていない。そもそも、「同志殺し」の思想など元々ないのに書きようがないのだ。

要するに植垣等は自らの責任逃れのために願望の当て推量をやり、いかにも現実味があるかのごとく、あらぬことを口走っていること、これが真相である。

客観的事実のない主觀的願望ならば幾らでも並べ立てられる、というものである。

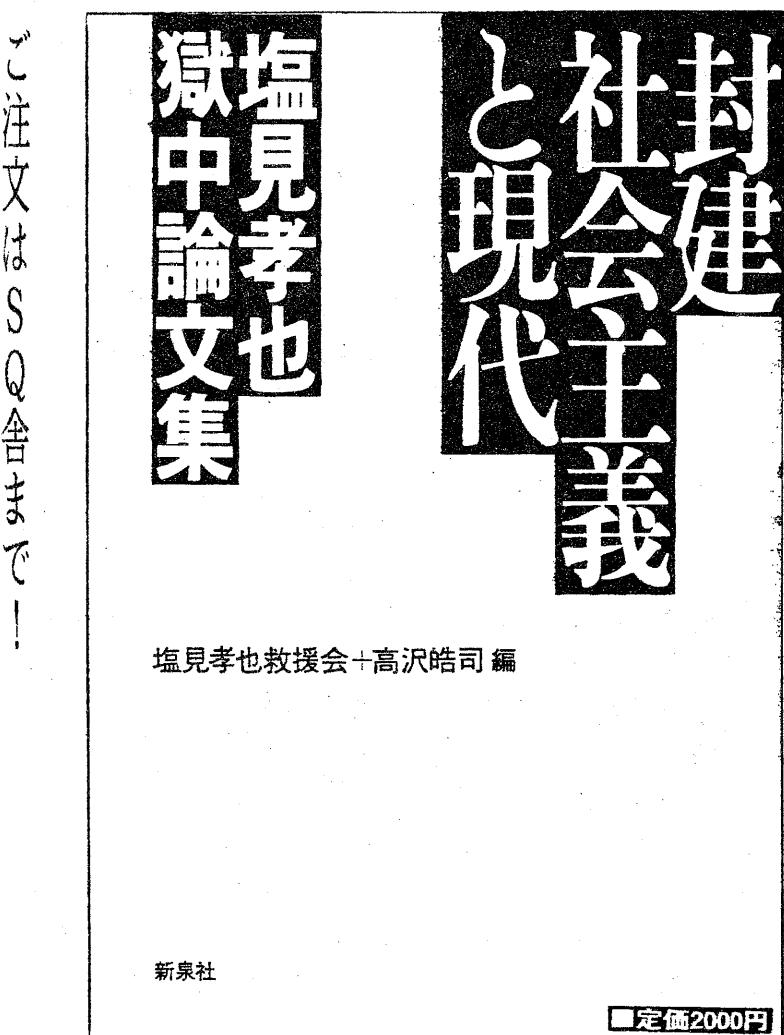
## 二章 森や植垣を塩見の人格的体現者と演出する植垣の狡猾

塩見が森になれないのと同様、森は塩見になれない。森は森であり、永田は永田である。森は森派閥を作り、森色を出し、分派し、「新党」を結成した。

植垣が、唯一根拠に上げるのは1971年の7月塩見が執筆した「革命戦争派の綱領問題」という文書である。この文書で、私が革命戦争路線を強力に主張し、毛沢東から引用した「人の要素」という文書などで革命戦争に於ける「精神的要素」を強調していることや、「（隊内）共産主義化」という文言をいちど一言使用していることをもって、以下のように“同志殺し”（肅清）の「首謀者」、「主犯者」と、有難くも告発してくれる。

いわく「連合赤軍問題は塩見さんの思想や理論が元々鮮明な形で検証された」「……それ故12名の同志の「殺害」は（野合一「新党」の反対者の抹殺ではなく）封建的社會主義の「社會主義による極左的革命戦争に消極的な者や組織の封建的体質に批判的な者」の「殺害」である。なぜならば、「共産主義化」はこれらの傾向の克服の為の運動だったからである。このことは塩見さんの提起した「共産主義化」が何を克服対象にしていたか、を考えれば、明白であろう」と判決までしてくれる。いやはや日帝ブルジョア検事以上のとんだ名推理である。この文書が「極左的な革命戦争への消極者や封建的体質に反対するものの“抹殺”まで“指示”していた」と御宅説をするのである。これは唯物弁証法とは縁もゆかりもない、全くのき弁としか言い様がない。或は言靈遊びの類である。植垣はいつのまにプラトニストやヘーゲル主義者になったのか。「共産主義化」という「イデア」や「絶対精神」が、ゴロゴロ一人歩きし、地上に顕現化し、あまつさえ、森や植垣や永田に無原則野合と誤った権力闘争の所産としての同志殺しを使嗾させたというのだから。第一、植垣はあたかも塩見が軍事路線としての「革命戦争路線」や「銃を軸とする殲滅戦」の路線を最初に提起したかのごとく演出し、それが絶対的規定力を持ったかのごとく言う。全く違う。この路線は革命左派が最初に提起し、実行したものである。この革命左派の路線に影響されて、70年と71年には赤軍派が第二次綱領論争をやりつ

つ、連続蜂起路線を改め、採用、実行したのである。この路線論争と実行過程を、塩見は獄中にあって一年以上にも及ぶ接見禁止中であり、全く預かり知らぬ。この過程の理論的所産は71年新年の高田論文（「赤軍」N0.8）やその外の獄中者を始めとする総括論争の諸論文として存在し、M作戦などもこの路線で実行されている。森論文も提出されている。塩見はこれらの諸文書を後になって読み、自分の研究や見解も加え、獄中からの再出発の決意を表明するものとして、「再総括」の文書として前記論文を書いた。これらは柴野君達の12・18下赤塚交番闘争やその後の永田達や森達が遊撃戦争路線を実行し始めた後のことである。これでもってしても、「提起した」とか「指示した」とかの言質が全くの妄言であることは明らかだろう。



第二、「共産主義化」という言葉は、当時の人民の間、闘争主体（といつて学生活動家）の間で自らの政治的・思想的欠点を自己史的にも、社会的歴史的にも分析し、自己批判や相互批判をやり、克服し、鍛え直し、自由で平等な共産主義的人間関係を創り出してゆこうとする、思想的、政治的営為の概念であつた。この文言の意味はそれ以上でもそれ以下でもない。又「革命戦争」や「遊撃戦」という言葉がそうであつたように、ここには厳密な規定性はなく、各人各様の思想的特性に合わせて、想い入れられ、使われていた。多分に空想的なものであり、そこにはヒッピーたちの共産化運動のイメージとか、女性解放運動の「コミュニティー運動」の色合いもこめられていたかもしれない。封建社会の百姓一揆の共同体のイメージであったかも知れないし、山岸会的イメージであったかも知れない。

我々はマルクス主義を自認するわけだからマルクス・レーニン主義の共産主義の原則的觀点を指針にしていたから、これら空想的共産主義とは理論上一線を画していたが、空想性も多分に有していた。大きな影響を受けたのは、中国紅軍の「三大規律・八項注意」や解放区社会や人民公社運動であり、あるいは文化大革命の革命委員会方式や毛沢東の「闘私批修・破私立公」や「團結-批判-大團結」とか「前の誤ちを後の戒めとして、病を治して人を救う」などの指示だったであろう。当時の中国からは日本の人民運動は多大な影響を受けているが、教条的に盲信していたのは、毛沢東思想派であり、革命左派であった。

赤軍派は、革命戦争路線でも、カストロ、ゲバラや中南米のマリゲーラとかバーヨなどの都市ゲリラを参考にもしていた。

いずれにしても、憧憬していた共産主義の性格には、空想的色合いがかったにしても自由や平等の関係を模索していたのであり、ドン・キホーテ的であっても、スターリン型の肅清を許容するような社会主義ではなかった。

あるいは、たとえ無自覚に、封建的性格を内包していたとしても、肅清を是認するような専制的な封建社会主义などを追及していたわけではない。毛沢東がスターリンを許容していたとしても、我々の憧れていたのは毛沢

東思想の中の、スターリン主義と闘った思想である。あるいは、文革以降暴露されてきた暗い部分ではなかつた。

少なくとも私が「隊内共産主義」として使った共産主義には、スターリン型のものや、封建社会主義的イメージを想定するものではなかつた、現実の階級闘争と無関係に、従つて政治討論や政治路線、方針と無関係に、個人的欠陥と目されるものをあげつらひ、これに言いがかりをつけ、部下達を統率したり、「脱落者」にスパイの嫌疑をかけ、処刑することで、組織を統制するような永田流の思想ではない。あるいは森のように第二次ブント当時の右翼体育会的なシゴキに類することをやり、殴りとばす類のものでもない。いわんや無原則野合をデッチ上げ、それを維持するために、「銃による殲滅戦を貫徹する」と称して、反対派を暴力で殺害・抹殺する「肅清」とは全然質が違う。植垣は、私の文言の中のどこに「肉体と精神の高次結合」の禅思想や「敗北死」とか「同志的援助論」の思想が孕まれていると立証するのか。森には森の、永田には永田の人間観、共産主義観があったろうし、それは塩見のものと共通性もあったかもしれないが基本的には違う。塩見の人間性－共産主義観が森によって憧憬されてそつくりそのまま具現されたのではなく、森は塩見の思想、人間観に親しく交際してもないし、染め上げられる訳でも無いし、影響を受けていたとしても所詮、森は森自身の個性に従がつて、組織の中心として森派をつくり独自の実践をやり、永田は永田の個性を発揮し、自らを開花していったのであり、森は適当に塩見を批判しつつ、自己に利用出来るところは利用したか知れないが、それが「新党」と「肅清」となったのだ。塩見が森になれないように、森は塩見になれない、のである。植垣は「森が塩見そのものになつた」と言わんとするが、まるで塩見を全能のマジシャン、カリスマの如く描きたて、他方催眠術にかけられ操り人形のようになつた夢遊病者の如く、森や植垣を描かんとしているが、これは狡猾にして卑屈極まる演出であり、塩見はそれ程、森や植垣に心酔されてないし、絶対的な権威もないし統制力ももつてない。森や植垣にしても、自分自身で政治的・思想的に嘗為する独立した人格である。

森も永田も植垣も自主的に判断したのだ。こんなことはおくびにも出さず、塩見を天まで持ち上げ、自分達を地下にうごめく卑屈な奴隸の如く巧妙に書き出し誤ちを犯したその尻を塩見のところに持ち込み、「塩見のせいだ」、「尻拭しろ」といつているのが、植垣の今の姿なのである。甘ったれた小児の言い草とはこのことなのだ。

赤軍派は一応中央集権的な組織であり、指導部は獄外にあり、森達がやっていた。革命左派に較べれば、赤軍派は比較的大きな組織であり、個性ある人物がたくさんおり、ハイジャック後の弾圧もあり統合性は弱かったし、獄中委員会や獄中党员は外に影響力をもつていたが、獄中委員会が機能していたわけでもなく、獄から外を植垣のいうがごとく強制する力など持ち得ていない。

第一次赤軍派の場合、統合力を塩見は有していたがHJの逮捕以降、その力を失っていたし、接見禁止中であり、何もできなかつたことは冷厳な事実である。接見禁止は71年7月の段階で解除されたが、その間、1年半があり、その後でも外など掌握し、強制する力など持ち得てないのは明らかである。この間に赤軍派は実質統合性をうしなつており、政治的・思想的分化は著しい。この過程で、森が外を掌握し、森派閥を形成しつつ、遊撃戦争路線に踏み出していったのであり、森は森独自の個性に基づいて思想や路線や理論を実践を踏みつつ、嘗為し、拡大再生産していくのであり、それは植垣の述べる如く、塩見の思想を具現してゆく道程ではなく、その反対に森自身の思想、人格を森色として出し森派閥として植垣や坂東も加えつつ現実化してゆく過程である。或いは永田達と交流しつつ、そうしてゆく過程である。

そして派閥から非合法非公然に分派し、永田派とともに、「新党」を政治無視でデッチ上げていったのである。これが現実の姿であり森は塩見の議長としての権威を自己の政治に利用したかも知れないが強制された訳でない。たとえ命令されても自己の意志で自らいつでも拒否できるしその限りで森は自由であつた。

森は塩見の人格を体現していたわけでもないし、これは現実に出来ない

相談であつた。思想や理論や路線は実践を通じ、具体的には組織、組織活動を通じて、物質化され、発展もされていく。一体組織の中枢になく、獄で接見禁止を受けている塩見が何故、森や植垣を統制することが出来るか、例えば、持原問題があったとか、その前に革左で笠原問題があったとか、そんなことは連合赤軍の数年後に知ることであり、植垣が自慢する第一遊撃隊の存在すら知らない。これで何で、「理論や思想を検証する」ことが出来るというのか！

塩見の「再総括」の論文は、今からみて、極左主觀主義傾向のそしりを免れえないと、とはいへ革命戦争路線を追及しようとした場合、あの種の路線は展開されざるを得ないのであり、あれ自身様々にあった主觀主義傾向の革命戦争路線の一部であり、個人的には投獄下で「闘争に再出征する」闘争宣言として書かれたものである。それが革命戦争派への鼓舞激励のメッセージとなっていたことは事実であろうし、そのことは有意義なことであり、光栄なことと考えている。又この論文をもって、如何に歴史的限界があったとしても、歴史的意義は十二分にあり、あの論文が植垣のいうように「銃による殲滅戦」のための「共産主義化」のための思想運動だと称して、実際は森や永田が個人本位に流され路線無視の野合をやり、その自己権力保持の為に権力闘争として、反対派を抹殺する「肅清」に必然的に帰結させた、などとは考えない。そのことは、これ迄の展開で明らかになつたことである。

### 三章 連赤問題は思想運動の極左急進主義的展開なのか

連合赤軍問題について、植垣・永田たちと塩見達の間には大きな認識の相異、論点がある。これはこれまでずっと論争され続けてきたことである。そしてこの論争には多大の関心が払われましたが、まだ明瞭に大衆化されてはいない、塩見が下獄し、大々的に反撃していないことや、植垣・永田が反弾圧・反死刑の人民の良識に掛け込み、巧妙に振る舞っていることや、旧赤軍派内部の論争が決着つけきれてはい、更には80年代の情勢の

我々にとっての不利な展開も存在する。

連合赤軍問題の大雑把な政治的・思想的本質みたいなものは、大体に把えられているが、連合赤軍の直接の事実関係、構造、原因、本質などについて未だ明瞭とされていず、種々な解釈が横行している。それが連合赤軍問題の大局の総括を未だ漠然とさせている。

直接の事実関係の不分明さは、主体的には塩見達にはずっと前からくっきりわかつていつつも、組織力・宣伝力に欠け、説得力のある実証性をもった文章を書き切れていないところに起因するが、最大の要因は植垣・永田達が裁判過程で権力と対決する為に嘘を言い続けていることにある。

銃を軸とする「共産主義化」という急進的（一面で反動的）思想運動だと、言いつづけていることにある。

彼らはここから赤軍派や革命左派の必然的到達点、帰結だと言い、新左翼や70年の左翼人民運動の所産だという。

そして、赤軍派や革命左派ひっくるめて、新左翼運動に責任を転嫁し、自己の固有の責任を回避し、それを全面清算しようとする。他方では殺した自分達、指導部派と殺された人々の境界を曖昧にし、結局は、殺された側に思想上問題があり、思想運動のやり方がまずかつた程度にとどめようとし、実質は自己美化、自己弁護をやったりする。銃撃戦についても実質肯定したりする口振りをする。

直接には森に赤軍派の側に責任があったとして一切責任転嫁しつつ、最後には、塩見にあるとするやり方をとる。極左的な思想運動が暴力化したというのは、一見あり得そうで、現実には有り得ない虚構である。



(a) 「共産主義化」という思想運動を推進することが何故に暴力に結びつくのか。思想運動に暴力、殺しが導入される必然性は余り見出だせない。死ぬのがわかっていて何故「総括」と称して、思想的反省を追求するのか。始めから排除・抹殺を目的とする別の意図があったとしか考えられない。暴力、抹殺は、「共産主義化」でなく別の目的から導入されたとしか考えられない。

(b) 「総括」にかける対象は、思想運動であれば、どういう合理的根拠で選別されていったのか。

(c) 総括にかけられる人と、総括にかけられず、総括を強行した人々とは、どんな基準があったのか。

(d) 思想運動ならば、何故、あのような多人数の人々が殺されることになったのか。

(e) そもそも「共産主義化」という思想運動は、一体どういう科学的基準をもち、どういうゴールが共産主義化なのか。どうみても、一応のこれといった共産主義論を持っていたとは思えない。

(f) 12名の抹殺という事態を引き起こした原因として、「共産主義化」という思想運動を設定しても、とうてい説明できない。12名が殺されていくダイナミックな過程を、「共産主義化論」という思想運動で説明することもできない。

(g) 「共産主義化」の思想運動と、仮にも、共産主義を目標とした場合、それが真剣であれば、最低限、自由と平等、民主主義の関係が追求され、人間愛、人間生命に対する尊重が基調に置かれるのは常識であるのに、それが虐殺的な処刑を含む、およそ共産主義の理念とはかけはなれた、大量の殺しに何故なったのか。全然説明がつかない。

(h) 思想運動ともなれば、森や永田は、理想的な完全な共産主義者として設定され、殺された人々は、不完全な欠陥に充ちた人々とされる。果たしてそうなのか。

いずれにしても、森、永田の共産主義觀が、およそマルクス・レーニン主義の社会主义觀とはかけはなれて、我々のいう日和見主義・利己主義を核とする封建專制の社会主义觀に基づいていたことは明瞭である。

(i) とはいって、このような曖昧模糊とした「共産主義化論」を原因とするならば、森や永田は「共産主義化」の「肅清」をやった場合、日和見主義、保命・保身の利己主義に陥ったか否かすら、曖昧になる。一体、森

や永田は保命・保身の日和見主義に流されていたのか否か。もしかしたら、無私の革命性故に、思想運動を推進したことにならないか。

以上、植垣や永田のいう「銃による殲滅戦」の為の「共産主義化」論には、すぐに疑問点が沸き起こる。そして、その疑問への回答は全然与えられない。

12名の大量殺しの原因を、やっさしくして「共産主義化」の為の思想運動だといいはり、なんとかして、この殺しに合理的でかつ革命的色合を残そうと心をくだく植垣や永田にしても、応えられない疑問点なのである。

植垣は、「極左的革命戦争に消極的な人々や、組織の封建体質に批判的な人々の抹殺であった」ことが「共産主義化」の本質であると、なんとかこじつけようとする。しかし、こんなことでは全然説明にならない。

極左的な革命戦争に消極的な人を、境界線にもってこようとするが、連赤「新党」に結集した人々は誰でも、銃による殲滅戦に反対しないし、赤軍派も革左派も反対しない。これは全くのこじつけであり、そういう理由で総括にかけられた人は、単なるいいがかりをつけられたとしかいいようがなく、理由はほかに考えられるのではないか。革命戦争を行うのか否かという限りでは全員一致してたのであり、殺しでもって抹殺するようなシヴィアな矛盾は発生していないのである。

(j) 組織の封建体質に批判的であった人、というなら少しあかる。それが、日和見主義の森、永田の指導部に対する権力闘争の性格という矛盾であるならばである。暴力を動員し、人を抹殺するような組織の緊張とは、既存の政治路線上、思想路線上の一大変更にともなう緊張であり、それにともなって指導部も替われば、組織構成員のメンバーの内外の関係、生活も完全にかわるような一大変更があった場合である。いわば、組織の解体、存亡を問われるような危機が生じた場合である。

そして、そのような緊張と矛盾は存在した。つまり、銃による殲滅戦を行うということを名文に、赤軍派から森派が非公然、非合法に分派し、革命左派から永田派が分派し、さらに決定的なことは、この両派が、これまでの政治路線、思想路線、組織路線を棄て、両派の路線の決定的相違を無視し、無原則に野合し、クーデター的に「新党」をデッチ上げ、それまでの構成員をそこに編入してしまったことである。

両分派が依つて立つ立脚点を棄て、共通の立脚点もないまま野合すれば、当然にもそれを推進した指導部（派）と、強引に編入された部分との間に

は、強烈な矛盾が激成されるし、双方の、過去森派であったグループと永田派であったグループにも緊張が激化する。そればかりか、対外面で、赤軍派と革命左派との間にも緊張が激化する。この矛盾も、激烈で暴力をともなう抹殺戦に発展する矛盾を孕んでいる。

理性的検討に基づく合意の上での、政治・思想路線が存在し、誰でも納得、心服する指導部であれば、少々の矛盾は止揚されていく。

政治思想路線は、党员が人民解放に自己犠牲を払って献身し、生命を棄てても惜しくないと納得する基準であり、それに基づいて自由と平等の民主主義的関係が保障されるし、指導と被指導も保障される。それは銃による殲滅戦という軍事路線によって置き換えられる性格のものでは到底なく、それ以上に決定的に重大な絆である。この絆は、実践の経験の中から、それを止揚するにたる新しい路線（綱領）が見出された時に、断ちきられることなく、より高次に発展したものとなるが、それ以外の形・理由で、解体、合流されれば矛盾が激成されるのは当然である。解体・野合を実現する以前にそのような志向を追求しただけでも緊張するし、実現し、それを維持しようとすれば、一層激化する。そして食うか食われるかの権力闘争そのものに発展するのも明瞭である。

これは思想問題以前の或いは軍事問題以前の政治路線問題、即組織問題だから、権力闘争に即なってしまうのである。そして、この政治路線の問題に正しい政治路線や思想路線を打ち立てることなく、利己主義・日和見主義故無謀に森や永田は踏みきったのである。そして、予想通り解決しがたい泥沼に、即時に突入することになったのである。そして、決定的組織問題、権力闘争を、即惹起させたのである。

何故、森や永田は、この無限則な暴挙にふみきったのか。それは、森や永田の経験不足にも依ろうが、保命、保身の日和見主義思想に基づいたものであり、共産主義思想とは反対の思想に陥っていたからにはかならず、根本は人民を主体とし、人民の利益本位に生き、人民の利益に個人の利益を一致させ、個人本位と闘うという、思想的営為をやりきれてないこと、人民本位、人民主体、人民の利益本位を体現すると確認される政治路線と思想路線を大切にし、そこに基づいて民主集中の自由と平等の同志愛に基づく関係を理解し、創り切れてなかったことにある。自己が持つ銃の武力を過信し、反対派を武力で圧倒し、自己利益の下に屈伏させうるという、軍事専制的な思想に対する過信であり、下部の反指導部闘争を、すぐには

「銃による殲滅戦」などやる気はないのに、この左翼的言辞で騙し欺瞞し抑え込めるという過信もある。しかし、一番深刻だったのは、新党結成以前から激化していた、永田の反米愛国路線放棄と獄中川島氏の反米愛国路線堅持の激しい権力闘争であり、それにおける永田の危機意識、利己主義である。森にあっては71年から72年にかけて、大菩薩グループが保釈出獄し、自らの権力を脅かすという保身に基づく危機意識である。日帝国家権力と対峙の緊張もあったが、森や永田を、路線放棄の無原則野合に奔らせた、直接の要因は、革左・赤軍派内の党内闘争において、危機に晒されていたという党内状況である。森・永田は、それぞれの組織において、党内闘争を正しく展開し、解決していく姿勢を放棄し、無原則野合の方向に走ってしまったわけだが、これは経験不足にも由来しようが、根本は自らの人民に奉仕する路線を大事にして、路線第一、政治第一、この意味での組織第一すべての問題を処理する共産主義者の作風を棄て、個人本位の作風、日和見主義、自分中心主義の保命、保身思想に流された事にある。

このような無原則野合からくる、権力闘争の性格をもった、全面的で深刻な矛盾に、この「新党」の依って立つ、政治・思想上の綱領的基準で理性的、政治的に対処し得ない以上、反対派を武力でもって抑えつけ、物理的に抹殺する以外に権力闘争に打ち勝ち得なくなったから、「肅清」に走ったのである。「銃による殲滅戦」の為の「共産主義化」運動という思想運動なるものは野合「新党」結成、維持の為の権力闘争推進、「肅清」の為のヴェール、名文以外のなにものでもなく、基本的には森・永田の思いつきのこじつけ以外ではないこともここで一層明瞭となる。より比重をあげて捉えても、権力闘争に従属する副次的要因でしかなかったのである。

このように、日和見主義に基づく無原則・野合「新党」結成、維持の為の権力闘争・「肅清」という視点を導入すれば、「共産主義化の思想運動」を原因として設定しては解けなかった、前述の(a)～(j)の矛盾はすべて氷解する。

(a) シヴィアな「党内」権力闘争という解決しがたい矛盾には、暴力に基づく抹殺の作業を導入する以外になかったこと。権力闘争と暴力に基づく殺人は一般に結びつきやすく、まして誤った権力闘争に於いておやである。

(b) (c) 「総括」の対象の選別は、野合に直接反対した人々であり、野合を無理矢理に強行・維持しようとしたことに反対した人々である。森

森・永田に情実的に結びつきそこに特権利害を得ることで、森・永田に理性をこえ、革命の理想を忘れ去り、媚び詣い、犬馬の労をいとわざつき従った阿諛迎合の人々は総括の対象にならなかった。

(d) 何故あのような大量な殺人に発展していったか？野合故に人々を理性的に合意させ、結束させる基準がなく、反対派が次々に生まれそれを抹殺すれば、更に反対する人々がふえる、といった形で、無原則野合と誤った権力闘争の悪矛盾が永続的に果てしない形で拡大再生産されざるをえなかつたから。

(e) 「共産主義化」論に基準があったのか？ゴールがあったのか？権力闘争の推進、抹殺が目的である以上あるはずがないし、こじつけをやればよかつたのだ。「共産主義化」論は日和見主義の殺しを隠すいちぢくの葉っぱだった。

(f) 「肅清」の過程は、まず外、獄中と結びつき、直接的に野合に反対した人々であった。意見書をもっていった加藤さんやその恋人の小島さんや獄中と「山」を結びつける役目の救対の尾崎さんに向けられた。

赤軍派にあっては都市、獄中と「山」を結びつけた遠山さんや行方さんや進藤さんのグループ、これは「新党」指導部たらんとする永田と直接に対立することによって抹殺された。永田と以前から対立関係にあり、森とも対立する危険があるとみなされた寺岡さん、同じく森と対立するとみなされた山崎さんに「肅清」は発展した。更に、森、永田は自己の権力を脅かすとみなされる如何なる結合関係も排除せんとした。しかし、母にならんとし吉野さんと夫婦であった金子さん、獄中の渡辺さんと絆をもっていた大槻さん、子供を連れて参加してきた山本さん家族にも「肅清」は及んだ。最後に、明確にほぼ最初から反対意見を表明していた山田さんが「肅清」された。こんな具合に直接に「新党」指導部に反対した人々から、この抹殺に反対し以前から対立関係にあった人々や「新党」指導部に批判的で森や永田の権力を脅かす危険があるとみなされた人々に「肅清」は拡大されていっているのである。

しかも、森と永田が相手の勢力を削ぎながら、しのぎあう形でバランスをもって進行していること、これらの進行過程はもはや完全に思想運動としての「共産主義化」運動とは到底いえない。日和見主義とこれに基づく無原則野合によって発生する矛盾と権力闘争が、反対派を暴力的に抹殺するといった本質を露骨に表出しつつ展開していっているのである。

(g) 無原則野合に基づく「新党」では、党内論争・党内闘争は、原則的な政治討論・思想闘争によって、止揚されて解決して行くことができず、矛盾は即権力闘争となり暴力による物質的抹殺に至らざるを得ない。そもそも「新党」が、森や永田の日和見主義、個人本位、利己主義に基づいている以上、人民本位と自由と平等や生命尊重・理性尊重の共産主義的精神とは全く無縁な専制的ファッショ的支配、封建社会主義に基づいてしか矛盾が解決され得ないので明らかのことである。

こうみれば、「共産主義精神を発揚する思想運動」が単なる全くの下部驅し、恫喝のための、権力闘争のためのベルでしかなかったことは全く明瞭であり、「共産主義化運動」とはおよそかけ離れた殺しが、共産主義化運動の名の下に展開されたことも説明がつくのである。

(h) 更にこう見てくれば、殺した森・永田指導部派と殺された12名の間には、明瞭な正邪、是非善惡の区別は鮮明となり、森や永田に全く革命性はなく、彼らの本質が、日和見主義、利己主義（それも封建専制主義をまといつかせた）であったことは明らかであり、「銃による殲滅戦」という方針も極左日和見主義でしかなかったことも明瞭になろう。

森や永田を革命的だったと考える人は全くの甘ちゃんであり、これらの人々は極「左」の形をとて、日和見主義、利己主義が顕現・存続することがわからない人々である。人民本位に生きんとし革命的であったのは、自己本位と闘い、指導部の極左日和見主義を革命性と錯認し、信じ、彼らの命令を真剣に革命の利益と信じ、生命まで捧げた、殺された12名である。

#### 四章 植垣は何故「共産主義化」原因論に固執し野合原因論に反対するのか

<一節>植垣の二つの「野合ではない」論について

一切の弁明の余地もない、共産主義運動とは縁もゆかりもない、ドス黒い、封建専制的、ファッショ的支配に基づいて暴力によって12名を抹殺してしまったという連赤問題を植垣は、ナントカ懸命に革命性をもった急進民主主義的思想運動であったかの如く取り繕おうとあがきまわり、悪知恵

の限りを尽くす。「銃による殲滅戦」の為の急進主義的な「共産主義化」運動と言えば殺しも美化できるし、自分達も弁護できるし、自分の責任は回避できるし、赤軍派や革命左派にも責任を転嫁できる。殺された12名にすら転嫁できる。世間もゴマかせるし、人民運動の中での総括運動も攪乱できる。

このような悪辣な企図をもって植垣は、日和見主義、個人本位に基づく無原則野合に原因する、同志の暴力的抹殺という眞の根源を必死で隠し、否定せんとする。今しばらく植垣の立場を見てみよう。「たしかに赤軍派と革命左派の間には、思想も路線も大きく異なっており、この相異を残したままでは、新党を結成するなどおよそ不可能なことであり、ありえなかつた。」と、一応野合は不可能であったかのごときポーズを取る。それではなぜ野合したのか。しかし後段で見るよう、日和見主義に基づく野合に連合赤軍問題の根源があったことを認めるわけではない。「そのあり得ないことが行われたのは、私達が邪心を抱き、惡意に凝り固まり、劣情をもよおし『野合』したからではない」の如く先回りして、野合の根拠・原因が、森・永田の日和見主義・利己主義に基づくものでないと否定してかかる。しかし、野合は日和見主義・利己主義に基づくもの、保命・保身衝動に拝跪したもの以外のなものでもないのだ。先回りして逃げ、予防線を張りつつ、野合の動機を次のごとくスリカえていく。

「赤軍派も革命左派も（『森派も永田派も』と読むべきだ—塩見一、植垣はこういう形で、分派・野合した森派や永田派をいつの間にか、赤軍派や革命左派にしてしまう）、革命戦争を実行せんとして孤立した闘いを強いられ、極めて困難な状況に陥っていたが、その中で、革命戦争の徹底遂行のためには、『共産主義化』による党建設が必要と確信した赤軍派（『森派』と読み—塩見一）が、革命左派（『永田派』と読み—塩見一）に対して、『共産主義化』を機軸とする党建設の思想を受け容れさせ（冗談でない、こういう『共産主義化』を主張していたのは永田だ—塩見一）、更に両派の路線の相異を『共産主義化』を通して解決すると主張し、こうして、『共産主義化』による新党結成に全てをかけてしまったからである。」

という克服し得る方途が「共産主義化」としてあったかのごとくいう。そして「共産主義化」による「新党」に全てをかけたという。また、だから「野合」ではないという。要するに政治路線や思想路線の相異を残し、その相異を埋めるのは絶対的に不可能に近かったが、森派・永田派は、「共産主義化」をやるという共通の確認があったから、路線の相異はその過程で埋められると考えていた。だから「野合ではない」というのである。今一つは、「共産主義化」を提起した「森派による永田派の解体であった」から野合ではないという。

マア全体として、この植垣の主張は支離滅裂で、全く論理的整合性を欠くものであり、こちらのほうで論理の脈絡をつながないと結論だけ—これ又願望としての—あるだけで、論証がないものだから、検討しがたいものである。がしかし、マアつきあう以外にない。

<第二節> 「共産主義化」によって野合の矛盾は克服できたか？—野合的にできる訳がなく、「共産主義化」は野合の矛盾を拡大する手段となった。

連合赤軍「新党」は、路線を放棄し、立脚点のないまま折衷主義的に合流したのだから、これはだれが見ても野合である。それでは野合の矛盾を克服する、路線的相異を後で埋めてしまうものとして決定された「共産主義化」によって、矛盾は克服され路線の相異はうめられたか。全然克服されず、相異も埋められず、野合は野合故の矛盾を悲惨な形で結果させ、破産してしまった。これで何故野合でないと言えるのか。その野合に伴う矛盾と破綻は、その結果が歴然とした形で検証されている。事実を見よう。野合性を糊塗するものとして案出された「共産主義化」によっても、統一性が得られず、「党員」の反対派が膨大に生まれ、それを12名の大量「肅清」として現実化させ、それに近い数の脱党=逃亡者を生み出し、弾圧がなければ、もっと犠牲者が拡大する状態となり、森・永田という野合の張本人が不在になったり、逮捕されれば、また、「共産主義化」、同志殺しという野合の矛盾の凝集が露呈されるや、たちまちにして、組織を貫く路

線的紐帶がないが故に、弾圧にひとたまりもなく解体し、雲散霧消してしまったこと。浅間山荘銃撃戦は国家権力との闘争ではあったが、野合と同志殺しの罪滅ぼしのための闘い、しかも、組織解体の逃亡過程で発生したという、極めて受動的な保身のためのものであり、人民を人質にして楯にするような質の闘いでしかなかった。巨大な犠牲と損失を「新党」はもたらしたが、成果は革命戦争貫徹のための反面教材を与える以外何ももたらさず、惨憺たる結果になってしまった。そしてそれは、日本人民運動に、取り返しのつかないほどの打撃をもたらした。赤軍派や革命左派は、このアオリを受け、これまでの成果を帳消しにされ、分解していく大損害を受けてしまった。

植垣はこのような結果をまず認め、この原因が野合「新党」に賭けたこと、その野合性からくる矛盾を解決し、止揚できると錯覚し、「共産主義化」という思想運動をカモフラージュにした、誤った権力闘争としての「肅清」であったことを認めるべきであろう。野合という初步的で原則的・基本的な誤ちを犯したがゆえに—それは、森・永田の日和見主義、保身・保命の衝動に基づくものであった—、「共産主義化」は野合性を解決できるどころか、逆に、野合の矛盾を拡大するものでしかなかった。野合という基本的誤りを犯し、それを前提にして、何故思想運動で解決できよう、野合反対派を思想運動という名目で抹殺する以外に存続はあり得なかったのだ。

野合「新党」と「共産主義化」の関係は、野合という誤りという基本的な誤りのなかに位置する、従属的な役割り位置であり、もともと路線の違う党派が、その違いを残して合流した場合、その矛盾を解決できる次元の存在ではない。逆に、基本的な誤りに基づき、その誤りを更に増幅する性質のものであり、名文とは裏腹に、本質は反対派の物質的抹殺のイチジクの葉っぱ以外のなものでもなかった。

<第三節> 「新党」は赤軍派による革命左派の解体・再編であったか？  
一正に折衷・均衡の双方自滅の野合であり、森より永田のヘ  
ゲモニーのほうが強かったこと。

「赤軍派」（森派と読み一塙見）による「革命左派（永田派と読み一塙見）の解体」だから野合ではないという今一つへの反論も、全く珍奇にして、事実に基づかない詭弁である。

まず事実問題として、“「新党」は森派への永田派の解体である”ということはないと。このように、「新党」の実態を一面化することはできない。永田派と森派は、両派間の関係では、双方バランスをもって殺し合い、永田と森の指導権争いも決着はついていはず森派系も5人の人々がなくなっていること。ほぼ永田派と同数であること。山岳根拠地路線やそこでの組織生活の作風、武闘訓練、思想闘争の作風は永田（派）に依るものであり、永田の実質的ヘゲモニーは確固としており—革命左派での向山、早岐さんの処刑の過ち、遠山さん批判が「共産主義化」の口実になっていること、加藤君、尾崎君、小島さん総括選定は永田であること—その他の抹殺にも永田は絶大な権力を振るっており、むしろ森は永田の実権・作風を理論化した側面が強いこと。永田は川島氏等革命左派の、反米愛国路線は森の指導で批判したが、社会主義革命路線に乗り移ったわけでもスターリン主義支持を清算したわけでもない。この主要に二つの論争が理論的、路線的に決着つけられてないから、「新党」は野合「新党」だったのだから。

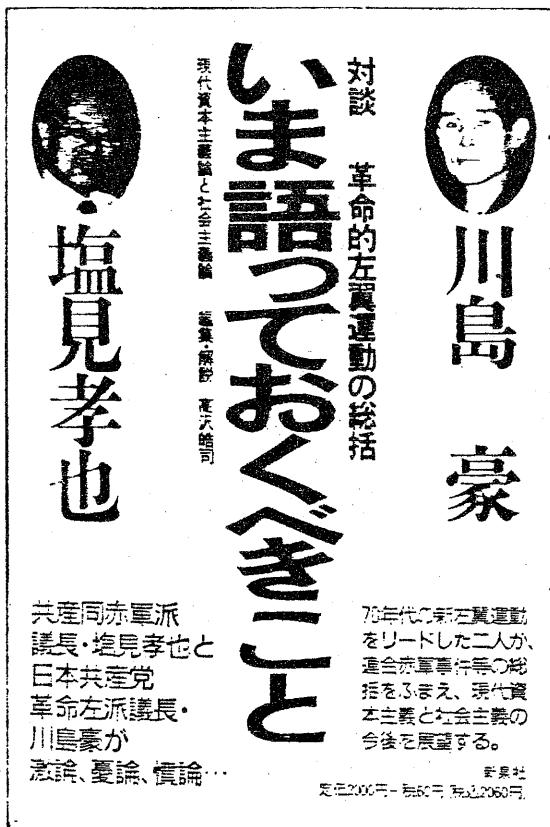
森が「共産主義化」論を暴力と結び付けて提起したから、永田派の森派への解体であるというのは、全く論拠薄弱である。

植垣は永田の自己保身・自己弁護の要求に従い、これまで、永田の「新党」結成と維持の過程における、また、革命左派・永田派閥の中での、永田の自己防衛のための専制主義的指導の在り様や二名処刑の意味については口をつむぎ続け、「永田は森につき従っただけ」という、大嘘をつき続け、12名抹殺を核心とする連赤問題の責任を「死人に口なし」で森にナスリつける作業に励んできたが、野合志向と「肅清」としての「共産主義化」

の「肅清」のヘゲモニーは永田の方に多くあったと思えるし、この在り様は赤軍派・ブント・新左翼系よりも、スターリン主義や文革の暗い面の作風の影響が強いのである。

遊撃戦争路線、山岳アジト方式も中国式なのである。「共産主義化」の元祖は森でなく永田の方なのだ。以上の事実からして、「『新党』は森（派）の『共産主義化』を掲げた永田派の解体である」という主張は根拠がなく嘘であり、総合的に見ても、「新党」は野合としか言い様のないものである。権力闘争と一体の「肅清」や抹殺としての「共産主義化」の元祖が永田であった事実からしても、森がそれを理論化したからとしても、別に森派への永田派の解体とは言えない。更に<二章>の論点であった、塩見の文章に書かれた「共産主義化」が言霊となって森に乗り移り人格化したという珍妙極まるオカルトまがいの植垣の「濡れ衣論」がいかに詭弁であるかは、ここまで来れば一目瞭然となろう。

ご注文はS.Q.金まで！



「連赤問題をいかにどうぞか  
書評が掲載されています。  
その1 (風雲50年)  
にて

ご注文はS.Q.金まで！

DEADLY IDEOLOGY  
Patricia G. Steinhoff

日本赤軍派  
その社会学的物語

パトリシア・スタインホフ著  
木村由美子訳

1972年、新左翼運動の高揚の中で、突如として引き起こされた連合赤軍事件。この痛ましい出来事を、20年にわたる当事者たちへのインタビューに基づいて解析。あらゆる集団に内在する人間の弱さと社会的相互作用のダイナミクスとしてとらえた画期的論稿。

なぜ、かれらのイデオロギーは死に向かって突き進んでいったのか

河出書房新社  
定価3500円(本体3396円)

## 読者拡大と年間定期購読のお願い

全国の読者の皆さん、「風雪」の購読をしていただき、ありがとうございます。「風雪」編集委員会より改めてお礼申し上げます。

今回、「風雪」は52号の発行となりました。ここで私達として、全国の友人・読者の皆様のご協力いただいて広く読者拡大を計りたいと思っています。皆様方の周囲の方で「風雪」を購読される知人を紹介していただきたいと思っています。編集委員会より試読紙を送付させていただきます。

又、合わせて年間購読料の納入もお願い申し上げます。

期間は、1月度から12月までを1期間とし購読料を6000円とさせていただきます。半期ごとの納入でも結構です。

よろしくお願いします。

郵便物は全て密封で送らせていただきます。

	半 期	年 間
密 封	3 0 0 0 円	6 0 0 0 円

風雪52号

1992年7月15日 ¥500

発 行

風雪編集委員会

郵便振替

新宿区高田馬場4-39-4-202

電 話

東京 7-70588 SQ舎

03-3364-1686